三四軒屋沖の 唐人の根っこ

昭和五十五年十一月五日号

田子浦、三四軒屋沖の海の底には魚網を引っかけたら、網を切らない限り外すことのできない障害物が沈んでいました。この正体不明の障害物を地元のシラス漁師たちは「唐人の根っこ」と呼び、この付近は長い間、危険個所として恐れられていました。

一体、この唐人の根っこはなんなのでしょう。

話は今から約百二十年前の安政元年（一八五四年）に逆のぼります。この年の十一月四日（新暦では十二月二十三日）朝九時ごろ、わが国最大級のマグニチュード八・四の安政大地震が遠州灘沖の海底を震源に起きました。地震の大きな揺れは家や立木をバタバタと倒し、同時に大津波を呼び起こして県下各地の海岸

引き揚げられたディアナ号の錨（51・8・3）

や港を襲いました。

この日、下田港には日本との和親条約の交渉をするためにプチャーチン提督の（ロシア（今のソ連）軍艦フレガード・ディアナ号が入っていました。

ディアナ号は全長約六十㍍、幅約十五㍍、排水量は約二千㌧で、昨年十一月の二十号台風で柏原海岸に打上げられたゲラティック号の四分の一ぐらいの大きさですが、当時としては大きな軍艦でした。

ディアナ号の難波

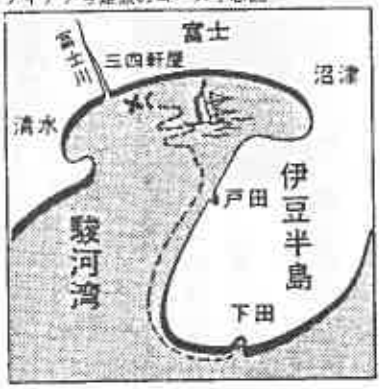
津波は下田港にも押し寄せました。ディアナ号は全ての錨を降ろしたのですが、荒れくるう波には歯がたちません。船は回転しながら岩礁に何十回も打ちつけられ、六時間後ようやく静まりました。舵はとられ、マストも折られて船は傷だらけで、修理しなければ沈んでしまう状態です。

日本側は修理港として下田港を示しましたが、ロシアはこの頃、イギリスやフランスなどを相手にクリミヤ戦争をしていたので、これらの艦隊に見つかりやすい下田港をことわり、戸田港を代わりの港として決めてきました。

修理港は戸田に決まりましたが、強い西風のため、傷ついたディアナ号は出航できません。修理を急ぐディアナ号は樽を船体にくくりつけ下田を出港しました。ようやく戸田港近くまで来たのですが、あいにく夕方から吹きはじめた東風のため海が荒れ、代用の舵がこわれてしまいました。船は駿河湾を二日間

漂流し戸田よりずっと西側の三四軒屋沖で錨を降ろしました。船は浸水を続け危険な状態になりました。「沈没だ！」最後の時を感じたプチャーチンは上陸を決めました。

ディアナ号を発見した三四軒屋の人々は、心配顔で見守っていました。やがて、乗組員を乗せたカッターが船から離れるのを見た人々は体に綱をまきつけ、乗組員全員を救助しました。三四軒屋の人々は、寒さにふるえる異国の人々に、自分の着ている上衣までぬいで着せてやるなど暖かい心で接したという話が残っています。

この時、沈んだディアナ号の錨が海底に残り、これが「唐人の根っこ」になったのです。

ディアナ号難波のコース予想図